Osaka University Knowledge Archive

Title	直示的移動動詞に関する日中対照研究
Author(s)	温, 雅珺
Citation	大阪大学, 2001, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/43284
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【2】

氏　　名	温（うぇん）　雅珺（やじゅん）
博士の専攻分野の名称	博　士（言語文化学）
学位記番号	第　16482　号
学位授与年月日	平成13年7月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 言語文化研究科言語文化学専攻
学位論文名	**直示的移動動詞に関する日中対照研究**
論文審査委員	（主査） 教　授　深澤　一幸 （副査） 教　授　春木　仁孝　　助教授　渡邊　伸治

論文内容の要旨

本論は、直示的移動動詞「來/去」と「来る/行く」及び動詞の後につく場合の「來/去」と「てくる/ていく」を対象とし、中国語と日本語の対照研究の立場から、日中両言語の「直示的移動動詞」における意味用法を比較しながら、両言語の相違点を明らかにし、そして基本的な意味用法における相違点がどのように派生的な意味用法における日中両言語の対応関係に影響を与えるかの説明を試みたものである。中国語または日本語だけでははっきりしないその言語の特質を見出すことを目指している。

本論の主な内容は5章から構成されているが、各章では次の内容を扱った。

第1章では、大江（1975）の「ホームベース」と、神尾（1990）の「情報のなわ張り」という概念を用いて、「來/去」と「来る/行く」における基本的な意味用法の使い分けを中心に分析した。

〈発話時に話し手と聞き手が到着点にいない〉という場面設定を行うと、聞き手を自分の家に遊びにくるように誘う場合、中国語では「有空請來我家玩」と「有空請去我家玩」のように、「來」、「去」の両方とも用いられるが、日本語では「家」が必ず話し手のホームベースになるので、「暇な時、家に遊びに行って下さい」が言いにくくなる。また、第三者のメッセージを聞き手に伝える、いわゆる伝達動詞文などの場合、中国語では発話時に話し手がいる場所に視点を置き、「來」と「去」を使い分けている。それに対して、日本語では伝達動詞の埋め込み文の表す内容が伝達者に属しているものとされているので、伝達者のところに視点を置き、「来る」と「行く」を使い分けている。以上のことから中国語表現では「ホームベース」または「縄張り」意識が絡む「來/去」の使いわけが日本語の「来る/行く」のようにはっきりしていないことが指摘できると考えられる。

第2章では「V來/V去」と「Vてくる/Vていく」における意味用法に関する先行研究を概観し、そこで見られる問題点を指摘した上で、本論の立場を概括的に紹介した。本論では「V來/V去」と「Vてくる/Vていく」における意味用法を、空間的移動を表す意味用法、心理的意味用法及びアスペクチュアルな意味用法の三つに分け、心理的意味用法とアスペクチュアルな意味用法が空間的移動から抽象化されたものと考える。

第3章では「V來/V去」と「Vてくる/Vていく」における空間的移動を表す意味用法を考察し、特に「來/去」または「てくる/ていく」が意味する移動によって移動させられる対象は何であるかという観点から、両言語の類似点と相違点を比較対照し、「V來/V去」と「てくる/ていく」における対応関係を明らかにした。

〈空間的移動〉を表す「V來/V去」と「Vてくる/Vていく」の対応関係は自動詞の後ろにつくか、他動詞の後

ろにつくかによって異なる。

例1）a．彼が走ってきた。　→「非継起用法（＝同時用法）」
　　b．ここですこし休んで行きましょう。→（「継起用法」）

「自動詞＋てくる/ていく」構文は、例1）のように「走る」の表す事態と「くる/いく」の移動が同時的に行われるという非継起用法（＝同時用法）と、「休む」の表す事態が先に起き、「くる/いく」の表す移動がそれに続くという継起用法の二つがある。それに対し、「自動詞＋來/去」構文は例2）のように非継起用法しか存在していない。

例2）a．他跑了過來。　→「非継起用法（＝同時用法）」
　　b．＊在這裏休息一會兒去吧。

つまり、「てくる/ていく」は自動詞の意味する動作と継起的な時間関係にある場合、「來/去」が対応しない。そして、中国語では「自動詞＋來/去」構文が継起用法を表せないのは、日本語「自動詞＋てくる/ていく」の接続助詞「て」が有する「継起」を表す機能の欠如が原因になっていると思われる。

「他動詞＋來/去」構文においては「來/去」が意味する移動によって移動させられる対象は客体であるため、例3）のように他動詞「借（借りる）」が「椅子（椅子）」などのような具体的な空間移動を実現できるものと共起する場合、「來/去」は共起できるが、他動詞「借（借りる）」が「廁所（お手洗）」などのように一般的にある場所に固定され、移動不可能なものとされているものを客体にとる場合、「來/去」は共起できない。

例3）a．我去借張椅子來。　→（椅子を借りてくる。）
　　b．＊我去借個廁所來。→（お手洗を借りてくる。）

それに対し、「他動詞＋てくる/ていく」構文においては「てくる/ていく」が意味する移動によって移動させられる対象は動作主体であり、他動詞「借りる」などはどのような客体とも共起できる。つまり、他動詞の後につく「來/去」は、意味する移動によって移動させられる対象が客体のみである場合、「てくる/ていく」が対応しない。逆に、他動詞の後につく「てくる/ていく」は、意味する移動によって移動させられる対象が主体のみである場合、「來／去」が対応しない。

第4章では「V來/V去」と「Vてくる/Vていく」における心理的意味用法をめぐって考察を行った。特に、日本語で「家主から家賃をあげてきた」という状況を、なぜ中国語では「房東漲房租來」が言えないかという現象、即ち主体からの働きかけ性にまで「來」の意味が拡張しない現象を、第1章で論じられた「ホームベース」または「なわ張り」の意識における両言語の相違と関連付けて論じた。日本語においてのみ「主体からの働きかけ性」にまで派生が進んだ理由は、日本語表現では「ホームベース」または「なわ張り」意識が強く働いていることから、話し手側の領域に向かってくる動作作用が「くる」のもつ「ホームベース」機能の支持によって、日本語らしい表現になるのではないかと考えられる。それに対し、中国語ではもともと「ホームベース」または「なわ張り」意識による「來/去」の使いわけがそれほどはっきり区別されないので、「來」は日本語の「てくる」のように動作主体からの働きかけ性にまで派生する理由がないと思われる。

第5章では「V來/V去」と「Vてくる/Vていく」におけるアスペクチュアルな意味用法を扱った。まず「起來/下來/下去」のように、アスペクチュアルな意味用法を表すには中国語では「來/去」の前に客観的方向移動動詞「起、下」などが共起することが、どのように「V來/V去」と「Vてくる/Vていく」における対応関係に影響を与えるかについて述べた。次に、動詞と「來/去」または「てくる/ていく」の表すアスペクチュアルな意味との関係を明らかにして、「起來/下來」と「てくる」、または「下去」と「ていく」が表す中心的な概念の違い、及び接続する動詞の違いを述べてみた。この章では特に、形式が表す中心的なアスペクチュアルな意味は一つであり、共起できる動詞の語彙的意味に規定され、形式における中心的なアスペクチュアルな意味から複数のバリアントが生じたこと

がはっきりした。例えば、「起來」は「起」の「起点重視」によって、変化の最初の段階が焦点化されたアスペクチュアルな意味（本論では〈変化の発動〉と呼んでいる）を表している。「蓋（蓋をする）、連結（繋がる）」などの変化の側面が捉えやすい（A.1）非漸次的な変化動詞が「起來」と共起すると、「(A.1）非漸次的な変化動詞＋起來」の表すアスペクチュアルな意味は新たな結果状態に変化した最初の段階、つまり〈結果相〉を表すことになる。それに対し、「黒（暗くなる）、亮（明るくなる）」などの漸次的な変化の側面をもつ（A.2）漸次的な変化動詞が「起來」と共起すると、「暗くなる、明るくなる」へと変化する最初の段階を表すようになる。また、「跑（走る）、唱（唱う）」などの動作の開始・真中・終了などの側面をもつ（A.3）動作動詞が「起來」と共起すると、動詞のさししめす動作の無の状態から、有の状態へと変化する最初の段階を表すようになる。本論では前者と後者をそれぞれ〈漸進相〉と〈始動相〉と呼んでいるが、先に断ってあるように、「起來」の表す〈漸進相〉には必ず開始時点が含まれている。

以上のように、本論文では主に中国語の「來/去」「V來/V去」と日本語の「来る/行く」「てくる/ていく」の意味用法を考察し、対応していない現象とそれらの現象を形成する背後に存在する機能の差異を究明した。特に「ホームベース」または「情報のなわ張り」の意識における両言語の相違点、動詞の後ろにつく「來/去」と「てくる/ていく」の対応関係、「て」の表す機能からの影響、「來/去」の前にくる「起、下」の表す意味からの影響などを明らかにした。このほかにも多くの問題について触れ、多数の実例をもって両言語の相以と相違を指摘し、明らかにした。しかし、以下の点についてはまだ現象を指摘したにとどまり、検討が不十分なところがある。これらの問題を今後の研究課題として考察していきたい。

1.「てくる/ていく」は、〈反復継続相〉の意味で解釈される場合、運動の時間的限定性が抽象化すると同時に、参加者の抽象化も連動している現象をダイナミック的に記述すること。
2.「來/去/起來/下來/下去」または「てくる/ていく」のみではなく、すべての移動動詞における文法化現象を考察し、特に、日中両語における移動動詞のアスペクチュアルな意味への文法化と、ほかの動詞グループのアスペクチュアルな意味への文法化との類似点と相違点を明瞭にすること。

論文審査の結果の要旨

本論文は、直示的移動動詞「来/去」と「来る/行く」及び動詞の後につく場合の「来/去」と「てくる/ていく」を対象とし、中国語と日本語の対照研究の立場から、日中両言語の直示的移動動詞における意味用法を比較しながら、両言語の相違点を明らかにし、そして基本的な意味用法における相違点がどのように派生的な意味用法における日中両言語の対応関係に影響を与えるかの説明を試みたものである。

本論文は、この直示的移動動詞を論じたこれまでの先行研究を、日本と中国とを問わず網羅的に検討し、その基礎に立って、日本と中国の近代小説からこの現象を示している多数の原文とそれぞれの翻訳文を取り上げ、その例文を非常に精密に分類したうえで、一つ一つ検討を加えている。その手法は、極めて堅実かつ合理的であり、その結果として、叙述は分かりやすく、結論もおおむね納得できるものとなっている。とくに、「V来/V去」と「Vてくる/Vていく」におけるアスペクチュアルな意味用法を論じた第5章は、分析が精密である。つまり、本論文は両言語の当該の現象の対照研究としての価値は高く、今後の研究の萌芽を豊富に含むものとなっている。

もちろん、さらに改善の余地が無いわけではない。各章ごとにはまとまっており、分析も詳細で、それぞれの問題についての著者なりの結論は出ているが、それらの結論の上にたって一層の体系化、総合化がなされていたら、さらに論文の価値は高まったと思われる。また本論文で扱われた諸問題を通して、アスペクト面から見た日中両言語の性格付けという点についても、さらに踏み込んだ考察が望まれる。しかし、このような問題点も残るが、直示的移動動詞の日中対照研究としての本論文の分析、説明が優れたものである点には変わりはない。

以上により、本論文は博士（言語文化学）の学位論文として十分に価値有るものと判断する。